



《モノ・モノ》

「旬ネタ」は、岩手の「旬」の人・食・モノ・街並みなどを紹介する企画です

「印染め(しるしぞめ)」とは、名前や屋号、図案といった「しるし」を染める伝統工芸。旗や手ぬぐい、前掛け、はんでんなどに用いられています。花巻市の「伊藤染工場」は、大正10年創業の印染めの老舗。「硫化染め」という昔ながらの技法を受け継ぐ、全国でも数少ない染物屋です。

模様の部分に糊を置き、化学染料に漬けて染め抜く硫化染めは、大正から昭和中期にかけ主流となった染め方。生地内部までしっかり染まり、使い込むほどに独特の風合いが出てくるのが特徴ですが、手間がかかるため量産が難しく、今ではほとんどの染物屋さんが他の方法に切り替えてしまいました。伊藤染工場でもニーズに合わせた新しい染め方も取り入れています。「やっぱり硫化染めがいい」というお客さんも多く、全国から注文が寄せられています。

3代目社長の伊藤純子さんは、そんな伝統の技術を守りながらも「印染めの新しい魅力も見つけない」と考えていました。ちょうどその頃、岩手大学教育学部でデザインを研究している田中隆充教授から「共同研



染めたくないところに糊を置いたり、染めたものを水で洗い流したり。歴史を感じさせる工房では、職人さんたちが真剣にものづくりと向き合っています

90年以上続く印染め(しるしぞめ)の老舗と、大学生の感性が融合した商品が誕生しました。その名は「絆ざくら」。製造した花巻市の伊藤染工場では、受け継がれてきた技術を大切にしながらもこれまでになかった現代的なデザインを取り入れ、伝統的な染め物の「新しい可能性」を引き出すことに成功しました。



大学との連携のなかで「思い込みの枠をはずせば、新しい可能性が見えてくることに気づかされました」と話す伊藤純子社長。伊藤染工場は震災後、津波で流失した伝統芸能の衣裳や幕、大漁旗を再現するなどして、被災地域の伝統文化の復活を支えてきました

究」の話が持ち込まれ、2009年5月、研究室の学生たちと一緒に商品開発に取り組みはじめました。

しかし、学生が提案するアイデアは、これまでの印染めの発想になかったものばかり。「固定観念から『できない』と思ってしまい…うまくいきませんでした」と振り返ります。2年目には発想力を養おうと学生と一緒にワークショップを実施。学生との交流に刺激を受け「社員たちの考え方の幅も広がってきた」ところで商品開発につなげていこうとしました。しかしその矢先に東日本大震災が発生。共同研究は中断してしま



額入りタイプは和風モダンなインテリアとしておすすめ



伊藤染工場(花巻市)

いました。

再び大学とつながったのは、震災から2カ月後。以前から共同研究に携わっていた下村さくらさんから「卒業制作として前掛けの柄をデザインしたい」と申し出があり、「せっかくの縁を大切にしたい」と伊藤さんが了承。古くからの木綿の生産地・愛知県産の「三河木綿」を使い硫化染料で染める、昔ながらの前掛けをつくることにしました。

桜の花をモチーフにした下村さんのデザインは8種類。桜を選んだのは、日本人も外国人も「日本」をイメージする花だから。「地域の人々の絆を紡ぎ、笑顔をつくり出しますように」という願いを含め「絆ざくら」と命名し、商標登録も済ませました。

「『絆ざくら』のデザインは、優美で女性らしく、奥行きがあって絵画のよう。一般的な前掛けは平面的で『作業着然』としているものが多いので、新鮮でした」と話す伊藤さん。この芸術的な仕上がりに「インテリア

『絆ざくら』が誕生

優美で女性らしいデザインにより

「前掛けは男性的なデザインのものが多いのですが、『絆ざくら』はしなやかで美しい、女性らしいイメージに仕上がりました。染めの深い色合いも、布ならではの立体感、素材感を引き出していると思います」と伊藤さんは話します。商品は前掛け(5000円)と、壁に飾る額入りタイプ(1万8000円)の2種類

アとして飾っては」というアイデアも飛び出し、急ぎょ額に入れた商品もつくること。東京や神戸の展示会に出展したところ評判は上々で、11月の発売以来、県内外から注文や問い合わせが寄せられています。

「今後はバッグなどの商品展開もしていきたい」と抱負を語る伊藤さんは「『絆ざくら』をきっかけに、新たな縁をつくっていけたら」と考えています。「いろいろなところとコラボレーションして、さらに印染めの可能性を広げていきたいですね」と、今後の商品開発にも意欲を見せていました。



今後はトートバッグなどのシリーズも作って行く予定(写真は試作品)